序

イースターの前四十日間のレント（受難節）は、信仰者にとって、一年の他の時とは違った特別なシーズンです。この聖書の手引きは、今の状態に満足していない人、過去に別の選択をしていれば良かったと思っている人、自分の価値観と実際の行為の矛盾に悩んでいる人のためのものです。レントには、私たちは、あるべき基準に足らず、神が召してくださった状態にかなっていないことを、神のことばによって知らされるのです。

レントは、今いるところから、神が招いていてくださるところ、かくありたいと願うところに向かっていく旅です。レントの精神を言い表した、こんな言葉があります。「いくたびも、いくたびも、あなたは、あなたの教会を、出エジプトの道に、レントの荒野の旅に向かわせられた。それは、われわれが、悔改めの心と、へりくだった思いをもってあなたの聖なる山に向かって歩み、われわれが、契約の民となって、あなたをほめたたえ、あなたのみことばに聞き、あなたの愛の偉大にして驚くべきしるしを喜びをもって体験するという神の召しを覚えるためである。」

レントの間、日々、みことばを黙想することによって、私たちすべてが、悔改めの心とへりくだり開かれたたましいをもって、過越の奥義に到達し、契約の民として召されていることをさらに深く、喜んで受け入れることを願い、祈っています。

一九九九年

ジョセフ・クリードン

こういうわけで私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。（20）

神と私たちとの間には、常に敵意が存在しているようです。私たちは神に近づくことを恐れ、善を恐れ、神に近づくことは人生をつまらなくさせることだと思っているのはそのためかもしれません。自分が自分の人生の主人公であるという幻想を捨て切れないのもそのためでしょう。

私たちは順調な時には神と親密になることを警戒し、苦しい時には、神との親密さを断固拒否し、神から距離を置くためにどんなことでもするのです。神がついには私たちをあきらめるであろうという希望をもって、私たちは自分たちの罪を神に投げつけるのです。

レントは神に自分を愛していただく時、神と和解する時です。神は私たちを愛さなくなることはありません。私たちをご自分に近づけるのをやめることはありません。私たちを捨てることはありません。態度を変えなければならないのは、私たちのほうなのです。レントは、私たちが神に近づくことができ、神の善が私たちの上に影を落とすのではなく、私たちに力を与えることを、もう一度信じる時なのです。神の善は、私たちの人生を豊かにし、もし私たちが神と闘うのをやめるなら、成し遂げることができると信じるのを助けてくれるのです。

そのきよさにおいて高名なある老修道士が、「どのようにして、そんなにきよくなったのですか」と尋ねられました。その老修道士は「私が若いころは神と闘って勝とうとしていた。しかし今は、神と闘って負けることを願うようになった」と答えました。

この老修道士のように、神との闘いに降参し、神に屈服する時が来たのです。

祈り　主なる神よ、私たちがあなたと戦うことに飽きさせてください。私たちが罪を捨て、あなたの愛に近づくのを助けてください。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（23）

神が私たちを創造し、私たちの各々に違った賜物と能力を与えられたのに、私たちがキリストに従うためには、その自分を否定しなければならないというのを、私は十分に理解することができないでいました。私たちが否定しなければならない「自分」とは、一体何なのでしょうか。

私たちひとりびとりの中には戦いの嵐があります。自己中心の「私」が、自己否定の「私」と戦っています。贖われていない「私」は自分のために尽くし、贖われた「私」は他の人のために尽くします。イエスは、他者のために如何に生きるべきかを示してくださったのですから、この戦いはすでに終わっているべきですが、戦いはなお猛威をふるい続けているのです。

イエスの生涯は、十字架の上で終わりました。彼は、自分を救おうとしませんでした。彼は政治的な救い主ではありませんでした。彼は律法学者やパリサイ人に、彼らが聞きたかったことを語りませんでした。イエスは、ペテロに、たとえ身を守るためであっても、剣をふるうことを許しませんでした。つまり、イエスは、大衆の意見やその必要に迎合しなかったのです。

イエスは、祈りの中でいかに生きるべきかを告げる父の声を聞きました。彼は他のすべてに反対する声に聞き従い、生き延びるための必要にさえも逆らいました。イエスは大衆の意見やその願いを否定したわけではありませんが、これらの強い人間的必要に迎合しなかったのです。なぜでしょうか。それは、父がイエスを人間の限界を超えたところに召し、どうしたら神のようになれるかを見出させるためでした。

もし、私たちがイエスのように生きることを選択するなら、私たちは、わざわざ自分を否定する必要がなくなります。なぜなら、私たちは他の人のために生き、その必要に仕えるのに忙しくて、神の愛を分け与えるという経験の中に没頭してしまうからです。

祈り　主なる神よ、あなたは私たちに自己否定を命じられました。私たちにどのように自己中心を越えたところに立ち、他者の必要に仕えたあなたの模範に従うのかを、あなたの力ある愛によって教えてください。

「なぜ、私たちが断食したのに、あなたはご覧にならなかったのですか。私たちが身を戒めたのに、どうしてそれを認めてくださらないのですか。」見よ。あなたがたは断食の日に自分の好むことをし、あなたがたの労働者をみな、圧迫する。（3）

レントは、神に立ち返り、神のみこころを行うことに焦点を合わせるときです。しかし、私たちはなんとしばしば、自分自身に向かい、神のみこころを邪魔なものと感じることでしょうか。私たちがレントに行う多くのことは、聖霊によってよりも、自己愛によってなされてはいないでしょうか。私たちは、この期間、断酒や禁煙をしたり、アイスクリームやクッキーを食べなかったりするのですが、それもまた、自分が何かを達成することを求めているに過ぎないのです。

私の父は毎年レントになると禁煙し、毎年それを守りましたが、母は最初の一週のうちに父に喫煙を勧めました。なぜかと言えば、その期間、父は悲惨であり、回りの人みんなを惨めにしたからです。私たちにとってレントは、父が禁煙をあきらめるまで、父に耐えなければならない期間でした。これは、教会がレントを定めた本来の意図とは違っています。

私の家族と友だちはアイルランドにいますので、私はできるだけ頻繁にアイルランドに行くようにしてきました。初めのころ、私が、ある親戚のところに行った時、その人は「あなたが来てくれたから、明日は、いっしょに魚つりを楽しもう」と言うのです。彼は、魚つりが好きかもしれませんが、私はそうではありません。魚がかかるまでじっと待っているというのは、私には我慢ならないものなのです。翌日、彼の言葉どおり、魚つりに行きました。彼は口では私のために魚つりに行くのだと言っていましたが、実際は彼のための魚つりでしかなかったのです。

私たちのレントの守り方も同じようかもしれません。神のためにしているのだと言いながら、実際は自分のためにしていることが多いのです。神は、私たちに、単なる断食、禁酒、禁煙よりも、親切であることや人を赦すことを求めておられます。神は、私たちに信仰の賜物を確立すること、心をしっかり保つこと、そして生活の変化を求めておられるのです。

祈り　愛の神よ、私たちに、自分の思いではなくあなたのみこころに目を向けさせてください。私たちがそのことを実行できるように助けてください。

「試し読み」はここまでです。

お気に入りましたら

ご注文ください。

Penguin Club
www.penguinclub.net